

# ひとり親家族を生きる子どもの発達支援

——子どもたちへのインタビュー調査を通して——

## Support for the development of the children surviving in One-parent family

Based on the interview with children

本 村 めぐみ

Megumi MOTOMURA

(和歌山大学教育学部)

2010年11月2日受理

### Abstract

The purpose of the paper is to make clear the way of the support for the children surviving in the one-parent family. Method for the data-collection was semi-structural interview. The subjects were 14 university students including male and female.

Main findings are as follows. 1) The difficulty that children in one parent family feel was “negative support.” They were really feeling the difficulties of how to cope with superfluous consideration given to them by the people whose family were normative-standard type with both parents and child. This “negative support” made themselves feel the danger of being excluded from their reference group. 2) The social resources with which they think to enable themselves to survive effectively in one-parent family were economic resources and their support-network of human relations. This findings suggested that reconstruction of new educational system through which they will be able to shake themselves free from the dominant value recognized by the majority of normative-standard family will be coming to be necessary. In addition to this, the findings suggested that the diversity of the value should also be much more emphasized. The author assume that, through those educational strategy and educational planning, the children in the one-parent family will be included and integrated into total society.

**Key words** : children surviving in the one-parent family, support-network of human relation, inclusion into total society, negative support

### 1. 問題関心と目的

#### 1-1 「標準家族幻想」からの脱却を目指す

これまで多くの家族研究は、「夫婦とその子ども」から構成される世帯(家庭)を中心に、親子関係や夫婦関係などの調査研究を蓄積してきた。一方、2000年の国勢調査データの推計<sup>1)</sup>によれば、2007年においては全世帯のうち「ひとり親世帯」は9%まで至り、未だに“もっとも多い”と世間的には認識されがちな「夫婦と子どもから成る核家族世帯」は全体の29%に過ぎない。実際、今日において最も多い世帯は単独世帯(30%)であり、こうした割合だけを見ても“夫婦+子”世帯を「標準」とする見方は、もはや大きな幻想である。我々、研究者もまた、長らく標準とされてきた家族像に目を向けているだけでは、現代家族の全体的な諸相を捉えることは出来る筈がない。

こうした現状から、これまで家族研究が等閑視してきた「ひとり親家族」を対象にした調査も徐々に増えつつある<sup>2)</sup>。例えば、過去に自治体レベルで行われてき

た家族調査などにも、ひとり親家族の実態把握が皆無だった訳ではない。しかし、それらを含めた「ひとり親家族」調査・研究の殆どは、その「親」の意識を把握することに終始してきた。

#### 1-2 「子どものまなざし」の等閑視

とりわけ、ひとり親家族研究・調査において、子ども自身の家族認識といった視点に行き届かずいた背景には一体何があったのだろうか。

著者は現在教育学部に所属する研究者として、とくに「家庭科」担当の小・中学校教員から「家族を教える」ことの難しさを度々耳にする。その内実についてヒヤリングすると、教師たちには、ひとり親家族の子どもたちを『複雑な家庭に育つ子どもたち』という言葉によってラベリングする傾向を持つと同時に『複雑な家庭の子どもは、家族について語りたがらない筈だ』という見解を持つこともしばしばであった。

しかし、本当にひとり親家族の子どもは自分の家族

を一切語りたくないのだろうか。もしかすると安心して「語ることが出来る」機会や場が与えられていないだけではないのだろうか。彼らの語りによる真実は、近年まで殆ど触れられる機会がなかった現状がある<sup>3)</sup>。

今日、教室のなかには、ひとり親家族の子どもたちは少数派ながら必ず存在する。彼らはマイノリティ家族の一員ではあるが、その内実への理解は別として、相対的にはその存在自体はその他のマイノリティよりも可視化された人々である。彼らは我々の身近に必ず存在しながら、その独自の家族認識は、ほとんど明らかにされて来なかった人々である。よって、彼らの率直な「語り」を抽出し、「教育」をも含めた彼らの発達支援を検討する必要がある。

### 1-3 親の(認知による)困難は子どもの困難か？

これまで親たちが「ひとり親家族」を営む上で困難としてきた事柄は過去の調査により明らかにされている。女性(母親)であれば第一に経済的な困難、次に就労の問題である。男性(父親)であれば子育て、家事の困難などが上位に挙げられる<sup>2)</sup>。ただし、それらはいくまでも親の認識上の困難であり、子どもによって認識される困難ではない。親や教師を含む大人達が気づき得ない子どもの認識に立った困難が存在するのではないだろうか。

以上の問題関心から、本研究では、ひとり親家族の子どもたちの生の言説を抽出することによって、彼らにとって、いかなる発達支援が有効であり得るのかを考察することを目的とする。

## 2. 調査と分析方法

### 2-1 調査の方法

本研究におけるインタビュー調査の方法は以下のとおりである。全部で14名の大学生たちへのインタビューを実施した。彼らは、一部を除き高い経済的階層にあるとは言えず、約8割の者が何らかの形で奨学金を受け、ほとんどの対象者は、調査時点においてアルバイトを行っていた。主な属性の詳細は、表1にまとめている。

#### 【調査協力者とインタビューの方法】

- ・14名(女子9名、男子5名)の母子家庭・父子家庭の大学生男女
- ・国立W大学にて、90名程度の受講生がいる教室にて、趣旨の説明と協力の呼びかけ
- ・調査期間は2008年12月～2009年12月まで
- ・平均年齢20歳、「離別」「死別」を共に含む。
- ・調査時間：90分～半日(1回につき)
- ・2年間間に必要に応じ、複数回の調査を実施
- ・反構造面接法

### 2-2 分析において依拠した理論

本研究においては、おおよそ「会話分析(ディスコース分析)」の基本的な考え方に依拠した。その考え方の基本とは、「まず言葉があって、それがモノを存在させる」という見方である。たとえば、「ふたり親家庭」という言葉はないが「ひとり親家庭」という言葉は存在している。

つまり、この言葉の存在によって、「ひとり親家庭」は標準的家庭から区切られるのである。

「会話分析とは、人々のやりとりにおいて、Xはどのように語られるのか?を明らかにする」分析手法である。「相互作用」の過程の中で「意味」は共同的に作られている。よって、本研究におけるインタビュー調査においても、インタビュアーである著者と対象者との相互作用のなかで「一人親家族の子ども」認識が、どのように相互に創造されてゆくかにも注意を払った。

また、会話分析のもう一つの視点として、社会の不平等への着目がある。「言葉は社会と共にある。ある意味、ディスコースは社会の中の不平等を反映する<sup>4)</sup>」と言われるように、例えば「たとえ一人親家族であっても〇〇〇」という言い方を何度も何度も繰り返すことによって、「ひとり親家族」=何らかの問題を内包するという前提・認識が再生産されていくことが示唆される。本調査においても対象者の語りのなかに透視される社会的な不平等に着目をしている。

## 3. 結果

### 3-1 「ひとり親家族」を生きるという現実は、どのように語られるのか？

それでは、当事者にとって「ひとり親家族」の子どもを生きるという現実はどのように語られるのであろうか。以下のような質問に対する主たる言説を抽出した。

Q 世間では色々な見られ方があると思いますが、あなた自身は、今日まで「ひとり親家庭」の子どもとして、どのような気持ちで過ごして来たと思いますか。

#### 【子どもによる「ひとり親家族」アイデンティティ】

①別に親を一度になくした訳ではないし、会おうと思えば会うことが出来てむしろ、その程度な距離が自分にも都合良い場合も多い(L・男性)

②親が2人揃っていたとしても、とても生きづらそうに見える人たちがいる。親が2人いるから必ず幸せとは限らないだろうし、親が一人だからといって必ず不幸なんて筈がない。自分は特に、否定的になる必要も感じなかった(M・女性)

③ずっと昔から、祖母が家事をして母が仕事に出て自分たちきょうだいがいる。これがずっと自分たちにとって普通の毎日の暮らし方だったから、何かが欠け

ているという気持ちにはなったことは一度もない  
(K・女性)

④苦労があったとしても自分に「非」はない。ネガティブな気持ちはない(I・男性)

前述の②のMさんは「親が一人だから」という理由で度々彼らに付与される世間からのステレオタイプな見方を「親が2人揃っていたとしても幸福とは限らない」という言い方で相対化している。また、①のLさんも同様に「社会的には親ふたりが揃った状況を好ましいとしているだろうが」という前提に立ち、しかし「むしろ」自分にとっては現時点での親子の距離感を肯定している。さらに、Kさん(③)やIさん(④)も「(ひとり親の子どもには何か)欠けている」ことや「(ひとり親の子どもに)非」があることを相対化するという試みを行いながら、社会的な認識と、当事者にとっての事実との剥離を訴え出ているとみられる。

### 3-2 彼らにとって「ひとり親家族」を生きる困難とはどのように語られるのか？

次に、ひとり親家族を生きる子どもたちが語る「困難」について抽出された主たる言説を提示する。その際の質問は以下のとおりである。

Q これまで「ひとり親家族」で暮らすことに何か生きづらさを感じたことはありましたか。

【親戚・友達・学校・社会からの「ひとり親家族」に対するラベリング】

①親戚の人に〇〇ちゃんは**母子家庭なのに**、ちゃんと勉強もして進学して偉かったねと言われると「**母子家庭なのに**」っていちいち何で?と思う(F・女性)

②これまで、学校の友達とかの会話の流れで、たまたま、うちの親は一人やねん、と話したときに、**周りに申し訳なさそうな空気が流れるのが面倒くさかった**。自分って、何か周りに気兼ねさせるような生き方なわけ?と思う(C・女性)

③すごく親しくなった先輩とか恋人でさえ、私の家族については、あまり触れようとしない。**本当はもっともって話したい。何でもかんでも聞いて欲しかった**(H・女性)

④家庭科の授業で、おうちの中で〇〇するのはお父さんですか、お母さんですか?と先生が質問をしたときに、端から当てていたのに、**それとなく自分は順番飛ばされた。先生は自分に気を遣っているつもりやったんか知らんけど、え!?!いまの何?って(笑)**(K・女性)

⑤テレビを観ていたら、ワーキングプアの母子家庭の悲惨さを描いていた。終わってから、「あれ?これってうちらも一緒?(笑)」と我にかえった。**テレビは、母子家庭のことを、ありがちなイメージにはめすぎちゃうん?って感じ(苦笑)**(D・女性)

子どもたちは、前述した幾つの語りからも推測されるように、親の離別(や死別)そのものを受け容れること自体を、さほど困難とはみなしていない。むしろ周

表1 調査対象者の主な属性

対象者	性別	年齢	離別 死別	母子家庭 父子家庭	ひとり親家族に なった時期(年齢)	きょうだいの ポジション	備 考
A	男性	20歳	離別	母子家庭	大学1年(18歳)	姉+本人	離別した父とは母親や祖父母に黙って会っている
B	男性	20歳	離別	父子家庭	小学校低学年	姉+姉+兄+本人	離別した母親とは一切会わず
C	女性	19歳	離別	父子家庭	1歳前後	ひとりっこ	母親の記憶は一切なし
D	女性	20歳	死別	母子家庭	19歳	姉+姉+本人	なし
E	女性	21歳	死別	父子家庭	高校2年生	姉+本人+妹	なし
F	女性	19歳	死別	母子家庭	中学3年生	本人+姉	なし
G	男性	20歳	死別	母子家庭	2歳	本人+弟	父親の記憶はなし
H	女性	20歳	離別	母子家庭	大学3年生	本人+弟	父親は頻繁に家を出入りして会っている
I	男性	18歳	死別	父子家庭	中学2年生	小学生の妹+本人	父親に恋人あり。現在、共に暮らしている
J	女性	21歳	離別	父子家庭	12歳	ひとりっこ	母親に会う機会があるが、父親に気兼ね
K	女性	20歳	離別	母子家庭	幼児期	双子の妹	母親に恋人あり。現在、共に暮らしている
L	男性	22歳	離別	母子家庭	高校2年生	ひとりっこ	母親には恋人がいる・両親には自由に会う
M	女性	24歳	離別	母子家庭	大学入学時	ひとりっこ	一時休学後に復学
N	女性	20歳	離別	母子家庭	保育所を卒業した後	妹+弟+本人	父親に会ったことは一度もない

男性：5人                      離別：9    母子家庭：9  
女性：9人                      死別：5    父子家庭：5

注1)「年齢」は初回インタビュー調査時(2008年)のものである。

注2)「ひとり親家族」になった時期(年齢)は、対象者の記憶による表現をそのまま記述している。

周囲の人々の先入観や、以下に示すような親による「世間に対する気負い」に対処することのほうが難しいと感じているのではないかと推測された。

#### 【世間に対する親の気負いに対する対処】

①親には、世間から後ろ指さされないようにという気持ちがあったと思う。思春期の時に、かなり自分の友達関係を介入してきて、めっちゃ頭にきたことがあった(J・女性)

②お母さんに、大学を決めるとき、ここなら誰からも認められる学校だから恥ずかしくないと勧められた。自分は、常に母の期待に応えなくちゃという気持ちがある(N・女性)

③世間の目をやはり気にしていたと思う。洋服なども「ひとり親のくせに」と言われなためやっただけでしょうね。そこまでお金ない訳でもなかったのに、常に質素にしなあかんという感じで、お洒落したい時期に全く洋服を買って貰えなかった(M・女性)

#### 【「ひとり親家族」であることを開示する面倒さ】

①親が一人と友達に言ったときに、ごめんって言われるのが嫌で、とりあえず暗くならんように、親が修羅場やった話も大概「笑い」に持っていく、みたいな…(笑)(H・女性)

②うちは、お母さんとお母さんのパートナーと、もう中学の頃から一緒に家族として暮らしています。そういうのって「言っても分かってくれへんやろうな」と思う人には、別に言わない。でも、分かってくれるやろうなと思う人には、ちゃんと言いたいです。言う人は絶対を選びます(K・女性)

以上のような生の言説は、彼らがいかなる困難を強いられて生きているかを如実に象徴している。

彼らが離別や死別そのものを受け容れ、適応するまでの困難や、離別・死別による家庭の「経済的困難」を全く挙げなかったわけではない。しかし、それらの困難よりもむしろ、彼らは周囲から「親の離婚が子どもの人生を駄目にしてしまった」とか「親が離婚している＝普通じゃない子ども」といった先入観を払拭することに困難を感じている。同時に、自身の親からさえ「ふつう(マジョリティ)と同じようにしなければならない」「ふつう(マジョリティ)に負けてはいけない」といった気負いに巻き込まれ、それらのプレッシャーを回避することに困惑して来たことが、多くの語りとして抽出された事が特徴である。また、「ひとり親家族」の子どもたちは、マイノリティとしての存在を表明することによって生じる周囲からの過剰な「配慮」や、不必要な同情に困惑を覚える傾向がある。そのため、彼らは周囲の「標準家族意識」の秩序をかき乱さない程度に、あるいは何らかの工夫を施しながら、自己の「家族語り」をせざるを得ない。よって、彼らは

「配慮」という名の下に誰からも「聞いて貰えない」「尋ねて貰えない」「触れられない」という経験を重ねることによって「閉じて生きる」ことを緩やかに強要されている可能性がある。

現在、母子家庭のうち半数の世帯の子どもが相対的貧困のなかにある。日本では、親の経済階層によって子どもの将来、すなわち進学から就職、就くことの出来る職業までが規定され、「貧困」が世代間連鎖する傾向が近年ようやく指摘されるに到った<sup>6)</sup>。そうした現実を鑑み、必要な支援を一日でも早く整備するように申し立てる義務が私たちにはあり、当事者の自己責任に解決を委ねている国家政策は変更されなければならない。

ただし、我々を含めた研究者やメディアなどが、ひとり親家族の個性や多様性をかえりみない一辺倒の「深刻さ」や「ネガティブさ」のみを汲み上げること、その方法については慎重でなければならない。なぜならば、その方法によっては、社会における「ひとり親家族」に対するあるステレオタイプなイメージの再生産に加担することに他ならないからである。ひとり親家族の子どもたちが生きるこの社会に、一方的に歪んだまなざしを作り出してしまふ危険性については、十分にセンシティブでいなくてはならないだろう。

#### 3-3 ひとり親家族を生きる上で何が最も有効な手段であったか

この調査では、彼らがひとり親家族を生きる上で、何が最も有効な手段(資源)であったかという視点からその回答の抽出を試みた。多くの場合、この返答には対象者たちが即答できるケースは少なかった。そこで、大学生に至るまでの学校期間における親子関係、友人関係、教師との関係、地域の人々との関係などを回想的に語って貰うことにした。それらの回想的な語りの中に、彼らが自身の境遇を決してネガティブには認識して来なかった幾つかの背景が透けて見えてきたと思われる。以下に主たる言説を提示する。

Q これまでを振り返って、ご自身の「ひとり親家族」としての暮らしが、決してネガティブなものではなかったと考える理由は何だと思えますか。

#### 【ひとり親家族を生きる上で何が有効な資源であったか：社会的包摂】

①自分は、最初は経済的な糧が重要だと思っていたけれど、やはり人間的な繋がりと言うか、周りとの情緒的な関わりを失わずにいられたことが一番大きいかもしれないと最近思う(I・男性)

②親の一人は足りなかったかもしれないけれど、今いる親やきょうだいの繋がりに十分に満足して生き

て来られたし、友達や学校の先生などから自分が認められて、恥ずかしいですが、愛してくれる存在があったからだと思う。だから、自分が将来教師になって母子家庭や父子家庭の子どもたちに出会ったら、その子らが「話したい！」って思っていそうな時に何でも聴いてやることだと思っている(B・男性)

彼らは少なくとも20年前後の人生のなかで何かしらの所属集団に「包摂されて生きて来た」と自覚している。時には自身の家族認識と社会からのまなざしとのズレのなかで“笑い”を取りながら適応することに挑むことや、葛藤を経験している。しかし、自身の承認欲求を満たしながら生きたいという人間の本質的欲求を志向できる人生を辿って来られた環境こそが、彼らが、ひとり親家族を生きるうえで抱えがちな困難を支えた資源とみなされている、と言えるのではないだろうか。

冒頭の問題関心でも述べたように、「彼らは語りたがらない」存在として認知されがちであるが、本調査の最後に尋ねた「なぜ、この調査に協力する気持ちになったのですか」という質問への回答は、その認知が反証される示唆を含んでいた。その回答は概ね3つ分類される。第一に、「社会のひと達に、自分たちのような生き方をちゃんと知ってほしいから」。第二に、「自分の家族経験が、研究など人の役に立つと思えると嬉しいから」。最も多い第三の理由として、「とにかく全部、これまでの自分の経験を誰かに話してみたかった」「誰かに自分の話を聞いて貰いたかったから」というものであった。彼らにとって「語る」という営みは、自分自身の存在証明であり、自身が生き抜いている社会からの「承認」願望を満たし、自己を支えるための積極的な彼らの挑戦だったのではないだろうか。

#### 4. 考察

##### 4-1 子どもの発達支援を考える上での「学校」教育：歪みのない認識とセンシティブさ

子どもが「子ども時代(～18歳)」の間に一定の長い時間を過ごす場所は「学校」である。そこで「家庭の営み」や「家族」について学ぶ最初の機会は、小学校5、6年生からの「家庭科」という教科のなかに存在する。

小学校の教科書にはあまり沢山の文字情報がない代わりに、多くの挿絵や写真が掲載されている。近年の教科書に数多く登場するのは「2人の親、子ども・祖父母」という構成メンバーであり、“テーブルを囲んで団らんをする家族”の姿である。授業を行う教師が余程の配慮をもって、教科書には登場しない家族の生活や、営み方・暮らし方を紹介しない限り、子どもたちにとってはそれが「一番ふつうで理想的な家族」として刷り込まれることは想像に難くはない。『家族全員で

団らんしていれば間違いない』とも解釈されるような国家的メタ・メッセージを、教師たちが無意識に子どもたちに送り続けてはいないだろうか。もっとも家族による「団らん」自体は否定されるものではない。しかし、家庭科という教科のなかで「食卓を家族全員で囲む」以外の団らんの形が一つして提案されないこと自体に、食事を常に共にするという条件を持ち得にくい「ひとり親家族」をはじめとするマイノリティ家族を排除してしまう可能性が大きく含まれることには敏感でありたい。

家族が全員揃った一家団らんとは、日本古来の伝統文化であるという刷り込みもあるが、それも一つの幻想である<sup>7)</sup>。今日社会において、どれだけの家族が同じ時間に同じ空間に居合わせ、食事を摂る条件を持ち得るだろう。現実の家族は、もっと各々の事情に応じて多様である。唯一「家族」を取り扱う科目である「家庭科」の目下の大きな課題は、家庭科が「標準家族」規範・あるいは幻想を再生産する源になりやすい傾向に“気づく”ことに加え、ひとり親家族のようなマイノリティ家族の一員である子どもたちをいかに教室・学校のなかで包摂し得るかにある。そこには、マイノリティのプライバシーを侵害しないという「負の配慮(ネガティブ・サポート)」によってかえって「排除の構図」を作り出すかもしれない可能性への眼差しが必要である。

今日、いかなる家族にも自助能力には限界が生じていることは自明の事実である。より「サポートを必要とする家族」を生きる子どもたちこそ、その家族生活のありようを安心して開示できる場所が必要ではないだろうか。本調査に協力してくれた対象者たちの語りからも透けて見えて来たように、「多様性の確保」を理念とする成熟した教室の雰囲気づくりが教育には求められる。マイノリティを生きる者達が最たる支えとするのは「排除されないこと」であるからだ。

以上の観点から考えると、教室でフォーマルにもインフォーマルにも「語る」行為は尊重され、本人の自律性に準じるべきである。我々は何を語るにしても、必ず他者から踏み込まれたくない領域を守りながら語るという行為を行っている。この「自己開示のラインを守りながら安全に語れる」という場所や人的ネットワークが、子どもにとっても子育て中の親にとっても、ある一つの支援になり得ると考えられる。なぜならば、「語る」という行為は、私たちの誰もが持つ「人と繋がりたい(所属の欲求)」「その集団のなかで自分の生き方や人生を承認されたい(承認の欲求)」という欲求をかなえる有効な一つの術であるからだ。

私たちは、実際「経験した出来事を正確にありのままに語る」訳ではなく、多くの経験のなかのどれかを主体的に選び取り、それに新たな意味づけをしながら、新しい自身の人生の物語を「語る」行為によって再構

築する存在である。本来は言葉を話せるようになったばかりの幼児期にあっても、子どもは家族を語ることはできる。少なくとも、子どもの認識に立てば、自由に「語る」ことにおいて抑圧を受けず、受容されることが、まずは彼らの困難を減じるばかりかその他の困難を支える源にもなる。

語る行為の受容は、子どもにとっては温かな居場所と承認を与える。一方、大人にとっては必要な支援の申し立ての手段となり、ときに、これまでの人生に整理をつけて次に踏み出すための重要な営みになり得るだろう。この視点こそが、近年、よく言われている地域における「子育て支援」を考える上でも重要な一つの要素かと思われる。地域における子育てネットワークを構築するだけでなく、そこにひとりひとりを決して抑圧しない語りの場を導入することが有効であると思われる。

#### 4-2 標準家族幻想を超える～新しい「家族」像の模索：「非親族」を伴った家族関係の再構築

1980年頃まで日本では「離婚家族」は一つの病理家族として捉えられている風潮が存在した。しかし、今日では「離婚」、まして「死別」とは、誰もが経験するかもしれないイベントであり、予測される人生上の「リスク」の一つであるといったニュートラルな見方が提示されるようになりつつある。それは、その「リスク」に対処していくことが、より当事者にとっての望ましい人生を「再構築」する長期的プロセスなのだ、という見方である。

本調査においては、子どもたちよりも、親達のほうが「ふつうの家族」幻想にとらわれて自らやその子どもを苦しめてしまうような一端が見られる語りが抽出された。しかし、「ひとり親家族」においては、いかに失われた家族の残像や「ふつうの家族」の幻想と上手に決別し、その後の人生や家族関係を肯定的に再構築できるかが、殊に子どもたちを中心に考えたときにも、その人生を決める重要な分岐点と言えるだろう。

ひとり親家族を生きてきた子どもたちは、ある意味では必要に迫られつつも、共に暮らす親が従来型の性別役割分業を脱し、それぞれの役割を柔軟に変更しながら生き抜く姿を目の当たりにしている。今日では、いかなる家族にも、その自助能力には限界がある。しかし、より小規模世帯であるひとり親家族が、家庭を営む方法をよくよく眺めてみると、子育てをする人々にとっての社会政策的な問題や不備と同時に、彼らの家庭生活における様々な「工夫」をも学び取ることが出来る。また、よりマイノリティな人々のくらしの実態を見据えたユニバーサルな社会政策こそ、全体家族にも恩恵がある筈なのだ。

本研究においては、最後に「非親族」を伴った「ひとり親家族」の生き方戦略や新しい家族の模索につい

て触れたい。

本調査では、約二年の間に複数回、インタビュー調査を実施した2人の対象者(Kさん、I君)がいる。彼らの共通点は、ある時期から、母親や父親が獲得した新しいパートナー(結婚はしていない)が、ともに一つ屋根の下で暮らし、彼ら非親族を含めて一つの共同体を築いているという点である。父母のパートナーとしての「非親族」を伴った新たな家庭経営は、子どもの視点に立ったときに、いかに認識されるかを明らかにするとともに、家族関係の再構築における「非親族」の存在意義について、彼らの率直な語りを通して考察してみたい。以下の①～⑥が主な質問内容である。それらに従って、彼らの語りを繋げて編集したものを以下に記述する。

##### 〈主な質問内容〉

①今、誰と、どのような暮らし方をしていますか。②何時から、どのようなきっかけで、今の暮らし方をしていますか。③お父さん、お母さんのパートナーをお家に迎える時はどのような気持ちでしたか。④今のライフスタイルについて、どのように感じていますか。⑤パートナーとなった方は共に生活する上でどのようなことに気を付けているように見えますか。⑥自身の家族スタイルについて知人・友人にどのような方法で開示していますか。

##### 【Kさんのケース：父親と離別】

『私はふたごの姉妹で、以前は父と離別した母と祖母と暮らしていましたが、わたしたちが中学生の頃から、お母さんのパートナーである〇さんと一緒に同じ家に暮らすようになりました。〇さんと暮らす前から、私たちはお互いの仕事の話、学校生活のこと、そして好きになった人の話など開放的に話しをする家族でした。ある時から、お母さんが「職場に、すごく歳が(下に)離れているねんけど、楽しく喋ってくれる人がおらんよ」と〇さんの話を食卓ですることが増えてきました。そのうちにお互いに好意を持っていることも知りました。

また、当時、〇さんがそのころ実家の方たちと上手くいっていない様子で、あまり家にも帰っておらず、食事もきちんとしていないことから母は心配をして、うちに連れてくるようになったのかな、と思います。最初は親心みたいなものが恋愛に、という感じでしょうか。気が付いたら〇さんは当たり前のように私たちと一緒に暮らすようになっていました。ただ、〇さんのほうは、結構、私たちには気を遣っているところがあつたと思います。私たちのほうが彼に偉そうなことを言ったとしても、これまで一度も言い返してきたりしたことはありません。喧嘩したこともありません。日頃から家族みなで、その人のことは愛称で〇ちゃんと呼んでいます。

私たちは、割とすんなり受け容れたようなところがありました。祖母はやはり、あまり快く思っていないようでした。たとえばお金の問題で、食費や家賃などが余分にかかるのも困るなあとか。でも、最近はずちで暮らすにあたって、まとまったお金を○ちゃんは出しています。私たちの学費などを出して貰うことは一切ありません。祖母は、今でも私達よりは世間の目とかを気にしていると思います。

以前と変わったことは、彼がうちに暮らすようになって母がどんどん元気になって若返っていったことです。母が元気になると、家のなかが以前よりも明るくなりました。それは一番嬉しいことでした。それから、○ちゃんも含めて家族と一緒に食事をすることが増えました。お鍋をするときは○ちゃんが作ると決まっていたりして…。また、姉がボーイフレンドのことで悩んでいるときも家族会議をして、○ちゃんも含めて、ざっくばらんに話したりしましたね。本当に何でも話す感じです。

あとは、週末に度々家族で出かけるようになったことです。母達が車で買い物に出ることが多いので、私たち姉妹も一緒に連れて行って貰うって感じです。○ちゃんと一緒に暮らすようになって、家族の団らんが増えましたね。

嫌なこと、と言うほどでもないですが、朝に洗面所に行ったときに○ちゃんが使っていて自由に使えないときとかに、何となくムっとして舌打ちしたり、とかありますね。あと着替えるときとか、男の人がいたら何処でもできないから、ちょっとは気兼ねしないとイケなかったりするのが面倒だったり。

あと、うちの母が、○ちゃんの実家の両親のことまで心配をしていて、掃除をしに行きあげたりとかするのですが、結婚している訳でもないし、そこまでのことないんじゃないかな、と思ったりするんです。でも、お母さんとしてみれば、何か責任を感じているとか、せずにいられない所があるみたいなのです。

私たちみたいな暮らし方って世間的には珍しいと思うんですけど、わかる子にはわかって貰えると言うか、「この子にやったら別にほんまのこと言っても大丈夫やろうな」と思う子は、家に遊びに誘ったりします。「あのひと、だれなん？」と聞かれたら「お母さんの恋人」ってそのまま答えますね。結構「へー、そんなやね」と自然に受け止めてくれます。なかには、自分も年の離れた人のことが好きになったから、お母さんの話を聞きたいと言って、興味持ってうちに遊びに来ることもあります。

中学生くらいときには、○ちゃんに普通に塾に送り迎えとかしてもらっていて、帰り道には友達も一緒に乗せて帰ったりしていました。友達やはり「だれ？」って聴きましたけど、「一緒に暮らしているひとやで」と普通に答えていましたね。

もし、うちの近所の人とかが、陰で「あの家に入っている男のひとは誰なんやろう」とか言われるくらいだったら、こそこそ言わないで、はっきりとそう私たちに質問して欲しいですし、ありのままを答えるつもりでいます。でも、こういうことを開示する相手は最初から選ぶと言うか、見定めてから言うのはもちろんありますね。分かってくれるひとは分かってくれると思うし、はじめから頭のかたい人なら、言っても混乱させるし、こちらも嫌な思いをしそうなら言わないでいます。

### 【1くん：母親と死別】

『今、父と妹、そして父のパートナーの女性と一緒に暮らしています。1年ほど前から父にはそういう方がいたみたいですが、最近になって父の経営している店を手伝うという形で家にやって来るようになって、そのまま自然と一緒に暮らすようになりました。実は、父には母を亡くす以前からDVの兆候があって、母と死別したあとは少しだけ緩和されているところもありましたが、完全に無くなるということはありませんでした。特にお酒を飲んだときは。僕は身体も鍛えており、父にどう言えばどんな風に激情するのもありがたい把握していたので、ある程度コントロールできたのですが、妹のことは守ってやらなあかんという思いが、ものすごく強かったです。

僕にとって小学生だった妹のことは常に心配の種で、彼女の喜怒哀楽が非常に激しいというか、精神が不安定なように見えていました。父のパートナーの方がうちに出入りするようになった時には、正直、大丈夫なのかと思うところもありました。父のDVはせっかく緩和されていたのに、その女性はまだ父のことを十分に分かっていない部分があるように見えたんです。喧嘩する様子とか見ていると、なんでそんな風に今言うんやろう、余計に怒らせるじゃないか、と。

父が誰とつき合うか干渉するとかじゃなくて、あまり父を知らない新しい人がうちに入ってくることで父のDVがかえって悪化することをそのころは一番おそれていました。

それが最近になって、その人が店を手伝うようになってから、予想に反して父は以前に比べるとだいぶ安定してきたみたいで。気持ちのよりどころが出来たせいなのか。まだ、心配なところが全くないという訳じゃないんですけど、何よりも妹がその人のことを○○ちゃんと姉のように慕っていて、一緒に料理を作ったりして、楽しそうにしているんですよ。妹が女の子らしいことを好みは始める頃に、僕らだけやったら対応しきれへんことをそのひとが上手いことしてくれたと言うか。

妹は学校に通っている地域と、暮らしている地域が違っていたので友達も作りにくいって言うのもあった

んですけど。妹とその人はすごい今は上手く行っているみたいで、ちょっとほっとしています。前は、僕に何でも相談していたのが、この頃はあまり何も言ってくへんようになってちょっと寂しいな、みたいな(笑)

やはり、その人が一緒に暮らすようになって、結果的には、僕は家族についてすごい肩の荷がおりたという感じが今はしています。

僕らみたいなライフスタイルは別にあってもいいんじゃないかと思う一方で、「僕自身」が何故かどこかですっきりと認めきれないような部分も正直、あつたりします。男の友達に、自分の家族について話したときには、あまりにも真っ向から否定的な見方をされたりしたときは、柔軟な見方ができへんやつやねんな、と思いつつも、それが社会での一般的な見方なのかなと思ったり…葛藤はあるんですが、今のところは前よりも僕らの家族は上手くいっているとは思います。』

以上、2人のインタビュー対象者に語られた「非親族」を伴った新たなライフスタイルが目下、社会的にどのようなまなざしの元に置かれるかという点については議論の余地を残す。たとえば、思春期の女子が暮らす家庭に母親のパートナーが入り込むことについて生じる懸念や、実際に起きてしまっている問題を私たちはイメージするだろう。

しかし、彼らが瑞々しく語ったように「非親族」と共に家庭を営むという方法は、いつも必ず何らかの「問題」や「複雑さ」だけをもたらすものではなく、共同体としてのあるルールや秩序を共に形成することを基盤にその家族たちがより幸福を追求しながら「生きていく」ための、ある段階における一つの戦略としてみなすことは出来ないだろうか。

社会のなかでは、いくら血縁の関係にあっても「家族」として共に生きることは難しいという人達が存在している。これからの社会では、誰とどう集って、どのようにして共に生きていくのかという課題が、個々人に問われる社会である。そうしたなかで、彼らを選び取って行っている生き方戦略は、新しい家族ライフスタイルについて、いくつかの示唆を与えているように思われる。

## 5. 本研究における今後の課題

最後に、本研究における調査の限界についても言及をしておきたい。第一に、対象者の問題である。本調査は、限られた「大学生」である。言い換えれば、「大学までの進学が可能であった若者たち」であるゆえに、一般化できるデータとは言えないだろう。彼らを相対的にみれば、仮に「ひとり親」であるために、様々な困難を抱えたとしても、大学生という学歴を持ち得るだけの条件や資源を持ちえた人々である。本研究の分析は、以上のような限られた属性の人々の語り

している点で当然、限界がある。よって今後は、たとえば経済的に大きな困難を背景に中学、高校までの進学しか出来なかったといったような子どもたちのインタビュー結果とも照らし合わせながら分析を加えることは、大きな課題となる。

第二に、このデータは「既にひとり親家族が抱える問題や課題を乗り越え、昇華させた者だけ」の語りによるものではないか、という疑義が生じかねない点である。つまり、本研究に見られる語りは自分の体験を語れるだけの自己開示が出来るレベルに達した特定の者だけに限定される可能性については大きく否定はしない。しかし、本調査では、実際には親の離別を経験して半年にも満たない「渦中」にいる対象者たちも含まれていた。そのような彼らも他者に「語る」という営みを選択した理由とは、おそらく自ら「語る」(自己開示する)という営みが彼ら自身をエンパワメントする契機になり得ることにあるのではないかと考えられる。よって今後は、安心・安全が確保された子どもの語り場づくりもまた「子ども」へのダイレクトな支援<sup>5)</sup>の一つのかたちとして模索していきたい、と考える。

近未来に「家族」という紐帯は人々にどう選び取られていくのか、そのなかで子どもが安全に公平に育つ環境をどう構成していくべきであるのか。いずれにせよ、人は誰かと集って生きていかねばならない。その多様な方法を、社会がいかに柔軟に確保出来るか否かに、その社会の成熟度が図られると言えるだろう。

ひとり親家族として生きた子どもたちの経験そのものが多様性に満ちている。本研究ではその一部のみを提示し、分析したに過ぎない。今後は、よりその個別性に接近していくためにも、ますます「語る」機会を待っている人々の声に耳を澄ましていく必要があると思われる。

## 注

- 1) 「生活動力2007 多世帯社会」博報堂生活総合研究所、2007に依る。
- 2) 本村めぐみ「各自治体調査における自由記述回答(第7章)」『ひとり親家庭等に関する都道府県および政令指定都市調査・支援策資料集』(財)日本家政学会家族関係学部会研究活動委員会、平成18年度～平成20年度報告書、2008.10では各都道府県がこれまでに行ってきた「ひとり親家庭」に関連する調査のほか、著者が各自治体における調査の自由記述回答を分析し、母子・父子家庭の父母たちが表出する困難と課題をアンケート調査と照らし合わせながら整理した。
- 3) 「離婚家庭の子どもの気持ち」NPO法人Wink編、2008.4では面接交渉に焦点化し、離婚家庭の子どもの現状を紹介している最も近年の書である。
- 4) 鈴木聡志「会話分析・ディスコース分析—ことばの織りなす世界を読み解く」新曜社、2007を参照。
- 5) 本村めぐみ「ひとり親家庭への支援—自治体調査・施策お



びNPO調査の分析から・各自治体調査における「自由記述回答」の結果から一」『家族関係学』第27号、日本家政学会家族関係学部会編、p.33-38 において、ひとり親家族への支援は、世帯や親にではなく「子どもへの直接的な支援」を検討すべきである議論を展開している。

- 6) 阿部彩「子どもの貧困—子どもの不公平を考える—」岩波新書、2008 をはじめ、湯澤直美ほか編「子どもの貧困白書」明石書店 2009. 8 など近年、多くの文献で母子世帯の多くが貧困世帯であることや、貧困の世代間連鎖が指摘されるようになった。
- 7) 表真美「食卓と家族—家族団らんの歴史の変遷」世界思想社 2010において、表は家族の幸福源泉とされる一家団らんが歴史の変遷のなかでどのように意味づけられて来たかを論じている。

#### 参考文献

- ・本村めぐみ「ひとり親家族で育つ子どもたちへのインタビュー調査(第2部)」『ひとり親家族における子どもの発達を保障する自立支援に関する実証的研究』平成19年度～21年度科学研究費(基盤研究(c))研究代表者：神原文子、平成22年5月
- ・神原文子「子連れシングル～ひとり親家族の自立と社会的支援」明石書籍、2010. 5
- ・氷室かな「離婚後の親子たち」太郎次郎社エディタス、2005.11
- ・Constance Ahrons、寺西のぶ子(監訳)「離婚は家庭を壊すか：We're Still Family」バベル・プレス、2006. 4 初版